

イネ縞葉枯病の防除対策を地域ぐるみで進めましょう！

長崎県

イネ縞葉枯病はヒメビウンカが媒介するイネのウイルス病です。平成20年は一部地域で多発生し、本年はウイルスを保毒したヒメビウンカの越冬虫が県内各地で見られます。

本病は昭和60年に多発生しましたが、本年も多発生が懸念されるため、下記の内容をよく理解して、地域ぐるみで防除対策を進めましょう。

縞葉枯病の特徴

生育初期の症状:新葉がこより状に巻いて伸び、早く枯れる。

ゆうれい症状といわれる。

生育後期の症状:葉に黄色の縞を生じ、茎は茶色をおびる。

穂の症状 :穂は出すくみとなり、もみは変形する。

本病のウイルスは稲のほか、麦類、あわ、イネ科植物などにも感染する。

ヒメビウンカの特徴

成虫は体調3.5~4mm程の小型のウンカで、雌雄で色が異なる。

幼虫で越冬し、1年間に5~6回発生を繰り返す。

また、セジロウンカ、トビイロウンカとともに海外から飛来する虫もいる。

稲のほか、麦類、イネ科植物を寄主(餌)としている。

伝染方法

ヒメビウンカは縞葉枯病の植物を2日ほど吸汁すると、ウイルスを保毒する。稲は保毒虫に1時間ほど吸汁されると病気に感染する。また、ウイルスは次の世代にも引き継がれる。



生育初期のゆうれい症状



穂の出すくみ症状



ヒメビウンカ成虫(雌)

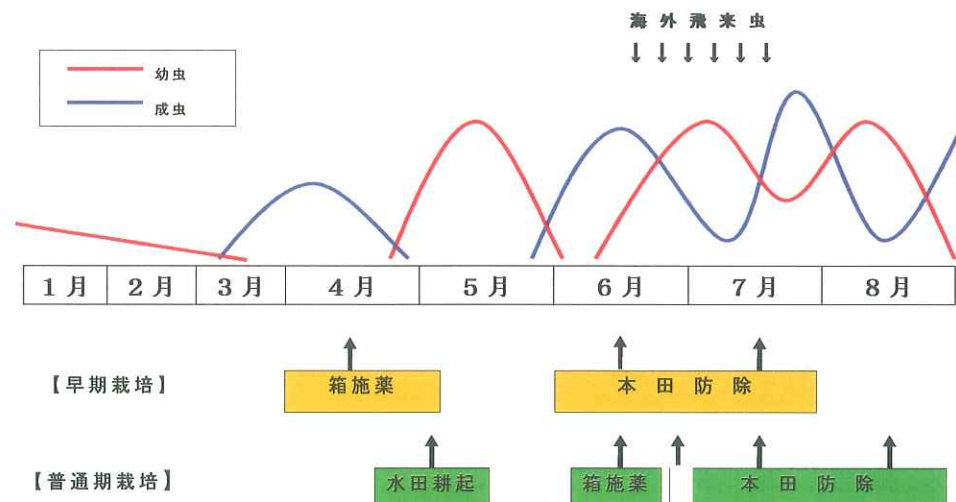
防除対策

1. 普通期栽培では4月下旬~5月上旬に水田を耕起し、ヒメビウンカの密度を下げる。
2. 普通期栽培では6月中下旬以降に移植をして、感染のリスクを減らす。
3. 移植時はウンカ類に効果のある箱施薬剤を選び、適正に処理する。
〔例として ①育苗時のプリンス剤処理にアドマイヤー顆粒水和剤かん注の追加処理
②プリンスとアドマイヤーの混合粒剤処理〕
4. 本田防除は、下図を参考に発生状況に応じて防除する。

海外飛来のヒメビウンカも重要な伝染源になるので、予察情報等を有効活用して、適期防除に努める。

(主な防除時期の目安:早期栽培6月、7月、普通期栽培7月、8月)。

ヒメビウンカの発生消長と防除時期



詳しくは病害虫防除所や各地域の指導機関にお尋ねください。